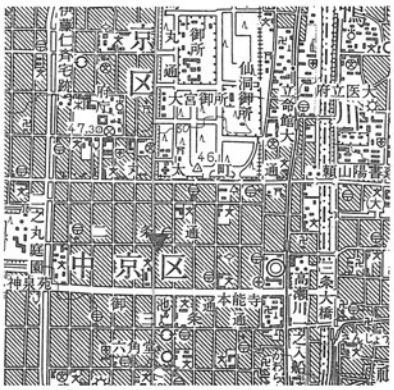
京都・平安京左京三条三坊十六町

1 所在地　京都市中京区烏丸通二条下る秋野々町
2 調査期間　一九八八年（昭63）四月～七月
3 発掘機関　㈶京都市埋蔵文化財研究所
4 調査担当者　小森俊寛・長戸満男
5 遺跡の種類　都城跡・都市（町屋）跡
6 遺跡の年代　平安時代～江戸時代
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査地は、平安時代においては平安京左京三条三坊十六町の北西部に位置しており、今回の調査面積は一九六㎡である。調査地北部は二条大路南築地推定ラインを含む。文献史料から、当十六町は、平安時代前半には小二条殿と称された邸宅が、また、平安時代後期には藤原顕頼邸が存在していたと推定されている。調査の結果、古代・中世・近世の各時代の遺構・遺物を多数検出した。



（京都東北部）

残念ながら、平安時代に比定しうる明確な遺構は、後期の井戸を一基検出したにとどまる。しかし、平安時代前期から中期の遺物も、中国越州窯産の青磁や、緑釉・灰釉陶器など当時の高級品を含む遺物が混入品としてではあるが出土しており、当町に平安時代を通じて階層の高い人々が生活していたことを示す資料といえよう。平安時代の二条大路関係の遺構は検出していないが、ほぼ重なる位置で室町時代後期の二条通り南側溝と見られる東西溝二条を検出した。このほか中世・近世の各期の遺構も多数検出している。加えて各時代の出土遺物の中には類例のごく少い貴重な資料も含まれており、遺物の面での成果も大きい。

木簡の出土した遺構は、南北が約四m、東西は東肩が不明だが検出部分で四m強、深さが検出面から一・五m程あり、平面が矩形を呈すると推定できる遺構である。西・南・北の各肩壁は、横板があてられ、杭で止められていた。性格は堆積土やその状況、また、横板・杭が肩部の簡単な崩れ止めと見られることなどから溜水施設的な池状の遺構と考えている。後にゴミ捨て穴に転用されるようである。桃山時代につくられ、埋没は江戸時代初頭に下る。

この遺構からは、木簡のほかに土器・陶磁器類、瓦類、木製品、金属製品、自然遺物など各種の遺物が出土した。土器・陶磁器類では、土師器焙烙・塩壺、国産の施釉陶磁器碗・皿・壺・茶碗・向付

・焼締陶磁器擂鉢・甕・壺、中国明末の染付碗・皿など、近世初頭の洛中の遺跡から一般的によく出土する日常雑器・茶陶類や、赤織部沓茶碗、京焼軟質施釉陶器碗など比較的例の少い資料も出土している。この他、漆器椀・塗箸・塗櫛・人形・打球・箆・刷毛・小型曲物（漆桶か）・小壺・箱・桶・塗下駄などの木製品や、和鋏・二股の引掛け金具・すっぽんの甲羅・ほたて貝など興味ある各種の資料が多数含まれている。これらの遺物は当地の遺跡の理解にとって必要であるということにとどまらず、同期の日常生活や文化の理解を深めるうえで重要な資料となろう。

8　木簡の釈文・内容

(1)　・「〈□□□